



しかし、襲いかかってくる兄を、ホオリは塩みつ珠を使って消れさせてしまった。ほうほうのていで助けを求めた兄を、今度は、塩ふる珠の力で、あつというまに海水を引かせ、救い出す。圧倒的なホオリの力にかなうはずもなく、ホオリは、すっかりつつしみたがうことを誓った。

「どうぞお許しください。これからのち、あなた様のために、昼夜問わず、守り人になってお守りいたしますから」

ホオリのそのことばは、今に至るまで、ホオリの子孫の隼人に受け継がれているという。

ホオリ  
古代、九州南部に住んでいた住人。隼人は朝廷(今)とて、海に溺れたホオリを救った。「隼人舞」といって舞を演じた。隼人一族の一部が京都府西京区の月読神社付近に移り住んだことから、「隼人舞」は、今でも月読神社で演じられている。

はじめて  
であらう

上卷

古事記

西田めい / 編  
中島梨絵 / 絵



だった。置き去りにしてきた子も心配でならない。

そこで、妹のタマヨリビメにわが子を育ててもらおうと、ホオリのもとにつかわした。その際、妹に次のうたをたくした。

赤玉は（琥珀の赤い玉は、）

緒さへ光れど（それを貫いている緒まで、美しく光るが、）

白玉の 君が装し（真珠の白い玉のような、あなたのお姿は）

貴くありけり（本当に尊いものでした）

これにホオリも、答えてうたった。

沖つ鳥 鴨どく島に（仲むつまじい沖つ鳥や鴨がたくさんいる島で、）

わが率寝し 妹は忘れじ（共にすごしたいとい妻よ、忘れはしない）

世のことごとに（いのちの限り）

その後、二人の息子のウカヤフキアエズは、乳母でもあった叔母のタマヨリビメと結婚し、四人の子どもに恵まれた。その四男はカ

ムヤマトイワレビコというが、この子こそが、のちの初代・神武天皇となる人物である。



太刀を外し、オオハツセに深く礼をして、申しあげた。

「わが娘カラヒメは、あなた様にさしあげます。しかしながら、私めを頼って、ここにこられた幼き皇子は、死んでもお見捨ていたしません」

ツブラノオオミは再び太刀を取って踵を返し、ふたたび、激しい交戦が始まった。

が、時を経るにつれ、ツブラノオオミの劣勢が濃くなってきた。初めから、勝ち目が無い戦であったのだ。矢が尽き、疲労のあまり、太刀を振りおろせなくなってしまったツブラノオオミは、主君たるマヨワに申しあげた。

「もはや、戦い続けることは困難でございます、わが君。誠に申しわけありません……」

幼き皇子も、ここまで戦ってくれた忠臣のことばに、覚悟を決めた。「ツブラノオオミよ。私のために、ほんとうによく戦ってくれた。ここまでとしよう。さあ、わが首を落としてくれ」

